SP-2

こどもの貧困と虐待の支援の実際

加藤 雅江

杏林大学医学部付属病院 患者支援センター 医療福祉相談室 課長

子どもたちにとってはどんな状況でも「家庭」や「親」はかけがえのない、大切な、守らなければならない存在である。例えば、「貧困」について。子どもの4人に一人、6人に一人が貧困であるといわれている。貧困の問題はなかなか表面化しないため対応も難しい。子どもたちがそもそも貧困を訴えてくることはない。家庭の中で、経済的な問題が発生したときに大人たちはどうするだろうか。すぐにSOSを発信する人はまずいないだろう。それはなぜか。困難な状況を伝え、助けを求めることでこれまでの自分の生き方を否定され、叱責され、責任を持って解決することを求められるのではないかと不安になっているのではないか。大人たちが「隠そうとしていること」を子どもたちも「何か変だな」と感じるが触れることができず「不安」を感じる。だからこそ、子どもたちも外で家庭のことを話すことは「いけないこと」と捉える。貧困や家庭の問題は「隠すこと」と教えられている子どもたちに寄り添い、支援をしていくことは本当に難しい。そもそも支援する、そんなスタンスで近づこうとしたら警戒され、課題や問題は隠されてしまう。

子どもたちが大人に送るサインが何を伝えようとしているのか、受け止め、必要な支えを手渡すことができるようになりたいと思う。

地域の関係機関のスタッフと子どもの虐待防止に対応する際に気を付けている事。

私たちが行う支援は、対象者に「虐待」「子どもの貧困」のラベルを貼って、家族関係形成のための大事な一歩を踏み出すことを妨げることが目的ではない。安全に子育てが行え、家庭が「安心できる基地」として機能できるように課題の気づきを対象者に促し、そのサポート体制を地域の中に作り上げていくことがその目的である。子どもの命や、生活の質を守るといったリスクマネジメントの視点と、対象者の、子育て体験、家族としての歴史を通してそれぞれが成長・アイデンティティの確立ができるように支援する視点、このバランスを、どうとっていくのかが重要となる。このような視点を持つれば、私たち支援者は、小さな躓きを見守り、サポートするという大きな役割を持つことができると思う。そしてこの役割の持つ意味はとても大きいと思う。この意味を考えるきっかけになるようなお話ができたらと思う。